

## 名詞句反復表現と「同」表現の機能論

加 藤 雅 啓\*

(平成3年4月30日受理)

### 要 旨

本稿では、報道文に典型的にみられる「同」表現は、単に文の冗長度を下げるという役割だけではなく、談話トピックの背景化という機能をも合せもつことを示す。さらに、名詞句による反復表現は文の冗長度を上げると一般には考えられているが、談話トピックの前景化という機能をも担っていることを論じる。

### KEY WORDS

backgrounding	背景化	discourse topic	談話トピック
foregrounding	前景化	cohesion	つながり

### 1. 名詞句反復表現と「同」表現

報道文は、Hinds(1977)によれば、次のような特徴を持つ。(i)情報提供が第一義である。(ii)トピックが明瞭である。(iii)編集者によるチェックを受けた文章である。報道文は、したがって、正確さと簡潔性が求められる。限られたスペースの中に必要とされる情報を明確に過不足なく盛りこまねばならない。このため、報道文では他の文章とくらべ、文の冗長度を極力下げることが要求される。すなわち、文中での同一語句の反復を避けるなんらかの言語手段が必要となる。報道文では、一般に、省略と代用表現の二つの方法が考えられる。具体例を見てみよう。

- (1) a. 今年初場所、千代の富士の連勝を21でストップさせたのは逆鉾だった。先場所も、もろ差しを果たしてヒヤリとさせている。この日の大一番、「オレはしらないよ」ととぼけたが、師匠の井筒親方は「勝ったら2百万円やる」と言ったという。(日経11/21/88)
- b. 今年初場所、千代の富士の連勝を21でストップさせたのは逆鉾だった。先場所も、(φ)もろ差しを果たしてヒヤリとさせている。この日の大一番、「オレはしらないよ」と(φ)とぼけたが、師匠の井筒親方は「勝ったら2百万円やる」と言ったという。(φ=逆鉾は)
- (2) 「投手生命が絶たれるのを覚悟で右肩にはりを打った」と発言し、全国保険鍼(はり)師・灸師・マッサージ師団体連合会から質問状を突き付けられた巨人の江川卓元投

---

\* 言語系教育講座

手が、同会に回答を寄せた。(日経2/16/88)

(1 a)の記事は(1 b)で  $\phi$  の位置に生じていた“逆銚”が省略されたものと考えられる。(2)では、「全国保険鍼(はり)師・灸師・マッサージ師団体連合会」の繰り返しを避け、代用表現を用いて「同会」として冗長度を下げている。このように、省略、代用表現を用いることで、同一語句の反復を避けているが、報道文ではいつでも必ずそうするのか、あるいは、反復は単に文の冗長度を上げる機能しか持たないのであろうか。以下、本稿では、報道文で典型的に見られる代用表現である「同」表現と名詞句の反復の機能について考察していくことにする。

### 1.1 名詞句反復と「同」表現の選択基準

報道文では、冗長度を下げる必要から同一語句の反復を避ける傾向にあるが、必ずしもそうになっていない場合が少なからず見られる。

#### (3) 日本スポーツ大賞に鈴木大地

アマススポーツで今年最も活躍した選手を選ぶ第38回日本スポーツ賞(読売新聞社制定)委員会が16日開かれ、水泳の鈴木大地選手(21)=順大4年=を選出した。

鈴木選手はソウル五輪競泳男子百メートル背泳ぎの優勝が評価されたもので、水泳からの受賞は47年の田口信教(当時広島商大)以来。また、ソウル五輪柔道95キロ超級優勝の斎藤仁選手(国土大教)と同五輪レスリング日本チームにオリンピック特別賞が贈られる。(日経12/17/88)

#### (4) 黒岩彰 悲願の銅

【カルガリー14日共同】黒岩が悲願のメダル獲得一。第15回冬季オリンピック・カリガリー大会第2日は14日(日本時間15日)、当地でスキー、スケートなど4競技を行い、スピードスケート男子5百メートルで黒岩彰(国土計画)が自己ベストタイの36秒77で3位となり、見事に銅メダルを獲得した。優勝は黒岩と同走して36秒45の世界新記録を樹立したイエンスウーベ・メイ(東ドイツ)、2位は36秒76のヤン・イケマ(オランダ)だった。(日経2/16/88)

(3)では、見出しにある鈴木大地が第1パラグラフで鈴木大地選手と名詞句で反復され、更に、第2パラグラフで鈴木選手と繰り返され、「同」表現は使われていない。同様に、(4)でも見出しにある黒岩彰が終始繰り返されて使われている。

次に示す例では、(3)、(4)とは異なり、名詞句ではなく「同」表現が用いられている。

#### (5) 尾崎<sup>将</sup>に来年のマスターズ招待状

プロゴルフの尾崎将司選手に15日、来年のマスターズ・トーナメント(4月6-9日・米ジョージア州オーガスタナショナルGC)の招待状が届いた。今年の大会では同選手が出場を辞退したため、来年は2年ぶり9度目の出場になる。同選手は今シーズン、日本人初の3週連続優勝など6勝を挙げ、11年ぶり4度目の賞金王の座に就く大活躍だった。

なお、全米プロで3位に入った中島常幸選手も既に7年連続の8度目の出場資格を得ている。(日経12/16/88)

(6) ヤクルト・若松が引退

ヤクルトの若松勉外野手兼打撃コーチ補佐(42=写真)は17日夕、神宮球場で記者会見し、体力的な限界を理由に現役引退を表明した。今後については未定だが、解説者活動に入るとみられる。

同選手は北海道出身で北海高、ノンプロの電電北海道を経て1971年ドラフト3位でヤクルト入り。19年に及ぶ現役生活で2062試合に出場し6808打数2173安打、通算打率3割1分9厘。

5000打数以上の通算打率ではトップで、身長168cmと小柄なことから“小さな大打者”と呼ばれた。72年(打率3割2分9厘)と77年(3割5分8厘)の2回、首位打者を獲得。またヤクルトが初の日本一となった78年にはセ・リーグの最優秀選手(MVP)に選ばれた。

現役引退について、同選手は「やはり寂しいが、一生懸命やってきたから悔いはない。今年になって体力の衰えを痛切に感じるようになり引退を決意した。78年の優勝が最高の思い出」と語った。(日経10/18/89)

(5)では、第1パラグラフの1行目にある名詞句尾崎将司選手は、「同」表現を用いて同選手と表現されている。(6)の例では、第1パラグラフの若松勉外野手兼打撃コーチ補佐は、そのパラグラフを飛び越えて第2パラグラフの初頭で同選手と表示され、さらに第3パラグラフを飛び越えて、第4パラグラフで再び同選手として表示されている。この間、若松勉選手を指示対象とする名詞句表現は1度も現れていない。

報道文の記事でありながら、(3)、(4)では同じ名詞句が反復され、(5)、(6)では代用表現である「同」表現が用いられている。紙幅の都合で割愛せざるを得ないが、前者のタイプが特殊なものではないことは、新聞を広げれば容易に見つけることができることから分かる。ここでの問題点を整理すると次のようになる。

- (I) なぜ「同」表現を使い、名詞句反復表現を使わないのか。
- (II) なぜ「同」表現を使わないで、名詞句反復表現を使うのか。

まず、(I)について考えてみよう。「同」表現が代用表現あるいは照応表現の一種であることはすでに加藤(1990)で指摘した。その際、「同」表現は Grice(1975)の協調の原理(cooperative principle)のうち情報の量に関する公理[a. (対話のその時の目的に即して)必要なだけと言え。b. 必要以上を言うな。]が言語使用の中で具現化された例のひとつであることを述べた。安井・中村(1984: vi)は Chomsky(1981: 65)で指摘された Avoid Pronoun という原則になぞらえて Avoid Name という原則を提案した。それは「代名詞の使用ですむときに指示的機能をもつ名詞を用いるな。」という原則で、同一語句の無用な繰り返しを避けることが代用表現の本務であることを述べたものである。たとえば、次の例を比べてみよう。

- (7) a. John killed himself.
- b. John killed John.

いま、John が自殺したと言いたければ(7a)を用いなければならない。もし、同じことを言うのに誤って(7b)を用いたとすると、それを聞いた人は、John という人がもうひとり別の John という名前の人を殺したものと誤解することになるであろう。これは再帰代名詞 himself を用いるべきところに名詞句 John を用いたからである。

(5), (6)で「同」表現が使われているのは、基本的には、Avoid Name という原則が関与していると思われる。ところが、「同」表現を用いるのは無意味な冗長性を避けるためである、という考え方とは矛盾するような例がある。

(8) 広告業界の“不動の第3位”大広の地位が揺らいでいる。同社は電通、博報堂に次ぐ老舗だが、新興勢力、東急エージェンシーの猛攻にあっている。……(日経12/12/88)

(9) ベータ離れ 東芝、お前もか VTR 戦争

「ついに東芝も我慢し切れなくなったか」——東芝が欧州に続いて国内でも VHS 方式の VTR (ビデオテープレコーダー) を販売すると発表したことについて、業界内ではこんな見方が流れている。VHS 方式が圧倒的優位に立つなかで同社は家電大手ながらベータ方式だけを製造販売してきたために国内シェア(市場占有率) 9%と低い地位にとどまっているからだ。……(読売10/6/84)

(10) 早大も土地信託

早稲田大学は、土地信託の手法を使って大隈会館とその周辺部を再開発し、新たに早稲田会館(仮称)を建設することにした。新しく大隈会館をつくるほか、ホテル、会議場、スポーツ施設、大学本部などと合せ、一体的に整備する。近く住友信託銀行と信託契約を結び、早ければ年内に着工、92年度の完成を目指す。大学が土地信託を導入するのは同大学が初めて。……(日経7/10/90)

(8)では、大広を同社で、(9)では、東芝を同社で代用しているが、「同」表現を用いてもスペースの節約には貢献していない。すでに指摘したが、報道文では、限られたスペースに情報を盛り込むという制約がある。語数を減らして、冗長度を下げることが避けては通れない。スペースの節約ということで言えば、(10)の例は、これに反している。早稲田大学の代用として代用表現の同大学が用いられているが、見出しにもある早大を用いたほうがスペースの節約になるのは明らかである。(8)–(10)は「同」表現の機能はスペースを節約して、冗長度を下げることだけであるとする考え方では、捉えることができない例である。

次に(II)の問題について考えてみよう。すでに(3), (4)で見たように、報道文には名詞句がそのまま反復されている例が見られる。このような例は、名詞句を反復することにより冗長度が高まるはずである。「冗長性を極力さける」という報道文に課せられた制約を破ってまで名詞句を反復するにはそれ相当の理由があるはずである。Bolinger(1979)は名詞句が反復される例として次の例文を挙げている。

(11) You don't need sulfur for drying apricots; sulfur ruins the flavor.

(12) When Joe enters a conversation, Joe expects Joe's friends to listen to Joe.

(13) When Joe walks down the street, Joe struts.

(14) What did John do?—He did what John always does—he complained.

- (15) \*Joe stumbled when Joe crossed the street.

Bolinger は、これらの例で名詞句が反復されているのは、性格付け(characterization)のためである、と述べている。(11)では、sulfur が反復されているが、これは sulfur の持つ性質を強調するためである。すなわち、「あの物質 ("that substance")」を読み手に想起させるのである。もし、sulfur を反復せずに、It ruins the flavor.とすると sulfur の持つ固有の性質(硫黄の臭い)が強調されないことになる。(12)は、Joe を反復することにより Joe の自己中心性という性格を浮き立たせている。(13)は、Joe は歩くときはきまってもったいぶって歩く、そういう男だ、ということを含意している。(14)でも、John は口を開けば文句を言っている、というように John を反復することで John の性格付けをしている。(11)–(14)では、名詞句の反復がその指示対象の性格付けに関与していることが示された。このことは、(15)が容認不可能であることから支持される。(15)では、Joe が道路を横断中につまずいた、という1回きりの行為が述べられているのである。Joe がつまずいたことは Joe の性格とは無関係である。したがって、ここでは名詞句 Joe を反復することはできない。

Bolinger(1979)の考え方を談話のレベルに広げたものに牧野(1980)がある。どんな条件で名詞句が反復されたり、代用表現が用いられったりするかは、概略、次の3つの条件にまとめられる、と述べられている。

- (16) a. 段落の初文では名前が反復される。  
 b. 文脈上、代名詞を使うと指示する人物があいまいになるおそれがあるときは当然のことだが名前を使う。  
 c. 主語の位置で名前の使われる率は主語以外の位置で名前の使われる率より比較にならないほど高い。これは主語の位置が話題の人物を強調するのに1番いい統語上の位置だからであろう。(ただし、aの条件がcに先行する。)(牧野(1980: 121))

牧野(1980)は(16)に続けて、名詞句を反復する積極的な動機はその指示対象を話題の中心にすえ、読者に親しみを与えることである、と指摘している。これについては、次の例で確かめてみよう。

- (17) テレビかな、それとも新聞?あるいはだれかから聞いたのだろうか……「キョーリン製薬」という名前、あるいはきっとご存知ですね。私どもの調査でも、知名度は90%。でも、キョーリンの薬をご覧になったという経験はございますか。おそらくほとんどの方がNOとお答えになるにちがいありません。キョーリン製薬の製品は、ほとんどが医家向け。お医者さまが病院で処方する薬です。皆同じ袋に入っていて、メーカー名もブランド名も書いていないから、ちょっと気がつきませんね。けれど知らず知らずのうちに、皆様やご家族とは、結構おつきあいしているというわけなんです。姿カタチは見えないけれど、キョーリン製薬、いまや世界100カ国以上のお医者さまにおつかいいただいています。どうか、お見知りおきのほどを。(日経7/13/90)

(17)は新聞に掲載された広告文である。キョーリン製薬もしくはキョーリンと言う名詞句が反復され、文字どおり読者に親しみをもってもらおうと言う主旨である。もし、名詞句を反復しないで「同」表現を用いたらどうなるであろうか。<sup>1)</sup>

(18) テレビかな、それとも新聞？あるいはだれかから聞いたのだろうか……「キョーリン製薬」という名前、あるいはきっとご存知ですよ。私どもの調査でも、知名率は90%。でも、同社の薬をご覧になったという経験はございますか。おそらくほとんどの方がNOとお答えになるにちがいありません。同製薬の製品は、ほとんどが医家向け。お医者さまが病院で処方する薬です。皆同じ袋に入っていて、メーカー名もブランド名も書いていないから、ちょっと気がつきませんね。けれど知らず知らずのうちに、皆様やご家族とは、結構おつきあいしているというわけなんです。姿カタチは見えないけれど、同製薬、いまや世界 100カ国以上のお医者さまにおつかいいただいています。どうか、お見知りおきのほどを。

(18)の広告文をよんで「キョーリン製薬」に親しみを覚える人はわずかであろう。(17)と(18)の例を比較すれば、名詞句を反復することの文脈的效果は明らかである。

ここで、もう一度「同」表現を用いた例を見直してみよう。(5)、(6)の文はそれぞれの話題の主にたいして、それほど親しみのもてない文であらうか。(17)の名詞句を「同」表現で言い換えた(18)で感じるほどの違和感は、おそらく(5)、(6)の文から感じられないであらう。同じ「同」表現を用いながら、一方では親しみの度合いが弱まり、他方では、それほど影響されないのはなぜなのであろうか。

このように考えてくると、すでに上で指摘してきた2つの問題点、[I]、[II]については、それぞれの問題は個別に論じられているものの、両者の問題を整合性を保った形で論じている研究はこれまでなされていない。以下、次節ではこのことについて考えていくことにする。

## 2. 前景化と背景化

### 2.1 馬場 (1986)「主要反覆語句系列」

これまで第1節で見てきた報道文は、いずれもいくつかの文が連なり、全体としてひとつのまとまった内容を現しており、この意味でひとまとまりの談話をなしているといえる。このひとつの内容を効果的に伝えるには、中心となるトピックがあり、これに沿って各文が有機的に結び付けられて自然な談話が構成される。談話の自然な流れを保つためには、当然、各文のつながりに工夫がなされている。照応表現である「同」表現も、そのような工夫が談話のなかで具体化された一例である。また、トピックについて言えば、「トピックは、それに関して談話が存在するのであるから、談話の中に様々な形で顔をのぞかせている。」という指摘がある。(安井(1978: 67)) いま、ある談話が示され、この談話のトピックは何かと尋ねられた場合、われわれは何を手がかりにしてトピックを割り出しているのだろうか。このことに関しては、馬場(1986)がひとつの示唆を与えてくれる。

ある「反覆語句（系列）」が

- ◎ 文章全体にわたって出現
- ◎ 反覆回数（頻度）が多い

という条件を備えていれば、その系列は、文章全体の主題・テーマを反映していると予想される。以下、このような出現状況を示す系列を「主要反覆語句系列」と呼ぶ。

またある「反覆語句（系列）」が

- ◎ 文章の一部分に出現
- ◎ その出現部内での反覆回数（頻度）が多い

という条件を備えていれば、その系列は、文章のある一部分の小主題・小話題を反映していると予想される。以下、このような出現状況を示す系列を「部分反覆語句系列」と呼ぶ。（馬場（1986：75－6）<sup>2)</sup>

「反覆語句」の反覆頻度の多少を客観的、形式的に認定するために、〈反覆距離〉〈区間頻度〉〈全体頻度〉という3つの尺度を用いて、操作的に、「主要反覆語句系列」、「部分反覆語句系列」を割り出している。〈反覆距離〉：その系列に含まれる反覆語句の出現区間の長さ、〈区間頻度〉：その出現区間内での出現回数（頻度）、〈全体頻度〉：文章全体から見た出現回数（頻度）これらの数値は、次の数式で求められる。

$$\langle \text{反覆距離} \rangle = \frac{j - i + 1}{\text{総文数}} \times 100$$

$$\langle \text{区間頻度} \rangle = \frac{\text{反覆回数}}{j - i + 1} \times 100$$

$$\langle \text{全体頻度} \rangle = \frac{\text{反覆回数}}{\text{総文数}} \times 100$$

（但し、その系列中の「反覆語句」の初出文を  $S_i$ （第  $i$  文）、最終出現文を  $S_j$ （第  $j$  文）とする。

この3つの数値を用いると、〈反覆距離〉が大きく、〈全体頻度〉が大きい「反覆語句系列」が「主要反覆語句系列」となり、〈反覆距離〉が中くらいで、〈区間頻度〉が大きい「〈反覆語句系列〉が「部分反覆語句系列」と考えられる。この場合、距離、頻度の大小は、馬場（1986）が51篇の新聞社説を分析し、帰納的に得られた基準に拠る。馬場（1986）によれば、〈反覆距離〉×〈区間頻度〉×〈全体頻度〉から得られる27通りの組合せのうち、「主要反覆語句系列」と認められるのは、それぞれ [〈大〉, 〈小〉, 〈大〉], [〈大〉, 〈中〉, 〈大〉], [〈大〉, 〈大〉, 〈大〉] の3通りである。<sup>3)</sup>

反 復 距 離	1－10%	小
	11－80	中
	81－100	大
区 間 頻 度	1－30	小
	31－70	中
	71－100	大
全 体 頻 度	1－10	小
	11－20	中
	21－100	大

さて、次に馬場（1986）の「主要反覆語句系列」によるトピック認定の妥当性を、2種類の報道文で検討してみよう。

(19) ソ連へTQC伝授 筑波大学教授が来月講習会

①ソ連がベレストロイカ（改革）の一環として日本の全社会的な品質管理（TQC）の導入を試みることになり、東欧での品質管理運動普及の実績のある筑波大学の司馬正次教授に対して指導を要請してきた。②ソ連は4月23日から約1週間にわたって企業体の幹部を対象にした講習を求めており、市場ニーズに合った製品づくりや、生産工程の改善につながる品質管理運動の手法を学び取ろうとしている。③司馬教授によれば、訪ソを要請してきたのはソ連の工業規格などを担当している Gosstandart（国家規格機関）。④同教授はTQCは企業経営の基本である市場ニーズに合った製品づくりや、生産の高率化などを考え方を植えつけるのに最適とし、87年からハンガリーを対象に指導、TQCを企業に普及・定着させた実績がある。⑤ソ連の要請はこうした実績を高く評価したものとみられる。⑥要請に対し同教授は、TQCは経営の発想が基本となるので企業体の経営人の理解なしには定着しないと、指導の対象をとりあえず企業体の幹部代表約30人に絞ることにしたという。⑦同教授は1週間程度の講習では、TQCの浸透は無理としているが、TQCの核となる人材を育てていくことにしている。⑧ソ連では経済の建て直しにつながる改革のため、企業体の幹部、従業員の意識改革を積極的に押し進めようとしている。⑨同教授は経済改革には高度先端技術（ハイテク）より、市場ニーズに合った製品作りや、改良を継続的に進めるという考え方、仕組を整える方が先決としており、今回の講習をその“種まき”にしたいと言う。（日経3/5/90）

(20) 中島常、お待たせ復活 V

①2年9ヵ月ぶりの勝利だったが、賞金を授与され、森田大会会長に腕を高々と挙げられた中島はその腕を振りほどいて自ら下ろしてしまった。②トーナメントに勝った喜びはあるのだが、それを“復活”と取られることを嫌ったためだろう。③昨季からフォームの改造に取り組み始め、現在では「まだ7合目」の状態と言う。④それでも先週のミズノオープン（2位）で確かな手ごたえをつかみ、この日の勝利につなげた。⑤優勝争いは同じ所属（ミズノ）の3人による静かな闘いとなった。⑥12アンダーの川岸に1打差で続く中島と米山。ハデなバーディー合戦もなく、どちらかと言うと我慢比べ。⑦中島が13番（578ヤード）のロングでバーディーを奪い、トップにたってから徐々に様相は変わってきた。⑧中島はこのロングを2オン。⑨第2打をスプーンで270ヤードも運んだ。⑩豪打の川岸や尾崎<sub>常</sub>にも負けない飛距離だ。⑪勝負どころに差しかかる時、これまで苦しんできたフォーム改造のひとつの“成果”を認識して、中島は「技術に対する自信」をかみしめた。⑫そして自らこのバーディーを「（柔道でいう）有効」と表現した。⑬14番で川岸がバーディーを奪い返し13アンダーで並んだが、中島は“無心”だったという。⑭そして残る難ホールをパーセーブに徹すると中島に心地好い風が吹き始めた。⑮15番から、ショット、バットともさだまらない川岸がなんと4連続ボギー、米山も17番で池に入れるダブルボギーと崩れていく。⑯中島の13番の有効は着実に「一本」に変わっていった。⑰「ちょっとキザに聞こえるかもしれないが、ボクは10年ひたってられる“技術の王国”を築きたいから、今苦しんでいる」と中島は言った。⑱それは「9合目の



状態になった時」に訪れるのだという。(日経7/2/90)<sup>4)</sup>

(19)の報道文で2回以上反復される名詞句、「同」表現を抜き出し、それぞれの〔〈反復距離〉, 〈区間頻度〉, 〈全体頻度〉〕を求めた結果、「主要反復語句系列」と認定されたのは「ソ連」= [89, 63, 56], 「司馬正次教授」= [100, 67, 67], 「講習」= [89, 38, 33] の3語であった。<sup>5)6)</sup>馬場(1986)にしたがえば、(19)の談話のトピックは「ソ連」, 「司馬正次教授」, 「講習」ということになる。このことは、これらの3語がこの記事の見出しにある語句とオーバーラップしている(「司馬正次教授」=「筑波大教授」, 「講習」=「講習会」)ことから支持されるであろう。しかしながら、主観的には、談話のトピックとして認められるであろう「品質管理」または「TQC」が「主要反復語句系列」から落ちてしまった([78, 71, 56])ことは馬場(1986)のトピック認定の手続、とくに〈反復距離〉の割り出し方に問題があるといわねばならない。<sup>7)</sup>このことに関しては稿を改めて論じることにする。

次に、(20)の談話を考えてみよう。(19)と同じ方法で計算をして、「主要反復語句系列」と認められたのは「中島」(=[94, 53, 50])だけであった。これは見出しともオーバーラップしており、われわれの主観的な談話のトピックと一致している。この意味で、馬場(1986)の「主要反復語句系列」=談話のトピックという考え方は妥当なものと思われる。

## 2.2 前景談話トピックと背景談話トピック

ここで、いま一度、談話に現れた名詞句と「同」表現に問題を絞って考えてみることにしよう。(19)では司馬正次教授が、(20)では中島が談話のトピックになっているが、読み手の印象は、司馬正次教授が「同」表現で現されている(19)より、名詞句が反復されている(20)のほうが中島の談話のトピック性をより強く感じるであろう。同じ談話のトピックであっても、書き手(記者)の意識の中には、一方で、ある対象をきわ立たせたいという気持が働き、他方ではそれを背景の中にとどめておき、新しい情報に読み手の意識を向けたい、という気持が働いていると思われる。このように、談話のトピックという項目では、同じ範疇に分類されるが、書き手(記者)の意識の中では正反対(一方はきわ立たせ、他方は背景にとどめておく)の機能を担っている言語表現が存在することは明らかである。すなわち、「談話のトピック」という従来の談話研究の概念では、網目が粗すぎて、上で見たような明らかに機能の異なる2つの談話のトピックを識別することができない。ここでは、報道文に関して、談話のトピックを次のように2つに分けて、定義する。

### (21) 前景談話トピック (Foregrounded Discourse Topic)

談話の中で、読み手の意識の前景にとどめておきたい談話のトピック。

### (22) 背景談話トピック (Backgrounded Discourse Topic)

談話の中で、読み手の意識の背景にとどめておきたい談話のトピック。

ここで用いる、前景、背景という概念は、Brown and Yule(1983)で引用されている Chafe(1972)に従う。

……foregrounding of a referent, as described in Chafe(1972), whereby a particular

referent is established in the foreground of consciousness while other discourse referents remain in the background. (Brown and Yule(1983:135))

これは、概略、指示対象の前景化というのは、談話の他の指示対象は背景におかれたまま、ある特定の指示対象を意識の前景に確立すること、という意味である。

### 2.3 談話トピックの格下げ、格上げ

報道文には、談話のトピックを背景談話トピックに、いわば格下げする機能を担った表現がある。これまで見てきた「同」表現がそのひとつである。報道文における名詞句反復表現と「同」表現の機能を前景談話トピックと背景談話トピックの観点から見直すと、次のような談話トピックの原理が関与していると思われる。

- (23) 談話トピックの格上げ：談話トピックから前景談話トピックへの格上げには名詞句反復表現が関与する。
- (24) 談話トピックの格下げ：談話トピックから背景談話トピックへの格下げには「同」表現が関与する。

この観点から、これまで見てきた例を見直してみると、(3), (4), (20)では、それぞれ、談話トピックである鈴木大地、黒岩彰、中島を前景談話トピックに格上げする意識が働き、名詞句反復表現が用いられた。一方、(5), (6), (19)では、それぞれ、談話トピックである尾崎将司、若松勉、司馬正次教授を背景談話トピックに格下げする意識が働いて、「同」表現が用いられたのである。また、(17)の名詞句表現を「同」表現で置き換えた(18)では、談話トピックである「キョーリン製薬」が背景談話トピックに格下げされたため、読み手の関心をとらえ、親しみをもたせる、という広告文としての機能が失われている。

### 2.4 談話原理と引用文

引用文の世界は書き手（記者）、読み手（読者）の意識とは独立して存在する別個の領域である。言い換えれば、書き手の意識も、読み手の意識も引用文の中の世界には直接には関与できないのである。したがって、談話トピックの原理は引用文には機能しないはずである。このことを次の例で確かめてみよう。

- (25) 特殊法人「社会保険診療報酬支払基金」（東京都、港区、正木馨理事長）の女性職員18人が、「勤続年数を基準に男性職員だけを一律に昇格・昇給させたのは、理由のない男女差別だ」と、同基金を相手に昇格遅れによる差額賃金の支払いなどを求めた訴訟の判決が4日、東京地裁民事19部であった。……中略……

辻嗶子原告団長の話 長い闘いだった。これほど単純な裁判に10年もかかるとは思わずに提訴したが、差別を許さない明確な判決を手にすることができて本当にうれしい。社会保険診療報酬支払基金は控訴しないほしい。（日経7/5/90）

(25)では「社会保険診療報酬支払基金」が一貫して「同基金」という「同」表現で繰り返され、

背景談話トピックになっている。しかし、「辻嗚子原告団長の話」のパラグラフでは、「社会保険診療報酬支払基金」という名詞句が用いられている。その理由は、このパラグラフは辻嗚子原告団長の話が直接引用されている部分だからである。したがって、書き手、読み手ともこの部分には関与できない。すなわち、談話トピックの原理は引用文には機能しないことが(25)によって確認されたことになる。このことは、談話トピックの原理(23)、(24)の存在を、いわば、裏側から支持することになるであろう。

## 2.5 談話原理と指示機能

最後に、談話トピックの原理(23)、(24)と名詞句表現、「同」表現の指示機能の関係について考えてみることにしよう。(23)では、談話トピックの前景談話トピックへの格上げには名詞句反復表現が関与し、(24)では、談話トピックの背景談話トピックへの格下げには「同」表現が関与している。これはなぜであろうか。その答えは言語外世界に対する指示機能に求めることができる。名詞句表現は言語外世界の指示対象を直接指示することができるのに対し、「同」表現にはそのような直接指示する機能は備っていないのである。「同」表現は、加藤(1990)で指摘したように、原則的には代示(substitution)機能を担った照応表現である。すなわち、「同」表現は、単独では言語外世界と交渉を持つことはできず、先行文脈にある先行詞を参照することによって、初めて間接的に言語外世界と関わりを持つことができるのである。この意味では、「同」表現は談話における「つながり」(cohesion)の機能を担っている。このような名詞句表現と「同」表現の指示機能の違いは、談話トピックの意識の仕方に反映される、と考えるのはきわめて妥当なことと思われる。談話トピックを意識の前景にとどめておきたい、すなわち談話トピックから前景談話トピックへ格上げしたい場合には、言語外世界の指示対象を直接指示できる名詞句表現にその任務を任せる。また、談話トピックを意識の背景にとどめておきたい、すなわち談話トピックから背景談話トピックへ格下げしたい場合、言語外世界と間接にしか関わりを持たない「同」表現を用いるのが自然であろう。

## 2.6 まとめ

以上、1. 1で提起した問題、(I)なぜ「同」表現を使い、名詞句反復表現を使わないのか、(II)なぜ「同」表現を使わないで、名詞句反復表現を使うのか、という疑問に対して、談話トピックに関する(21)、(22)の定義と、談話トピックの格上げ、格下げという原理(23)、(24)によって、妥当な説明を与えることができることを示した。

## 注

- 1) 報道文では、発話の主体が当事者の場合、「同」表現の一人称形である「当」表現を用いるのが普通である。この問題については稿を改めて論じることにする。
- 2) 馬場(1986)では、反復を「反覆」と表記している。
- 3) 馬場(1986)では、実際の文章を分析し、その結果から帰納的に得られたものである、とされている。
- 4) 文番号は原文にはないが、数値を計算する便宜上、筆者が付したものである。

- 5) 馬場(1986:74)では、「「反覆語句」を、単に、同一の語形を持つ語句とするだけでなく、広く、同義・類義の語句も含めている。」と注記がある。
- 6) 馬場(1986:74)では、同一文中に2つ以上の同一の「反覆語句」が含まれている場合は、1回として勘定する、と述べられている。
- 7) ここでは、ニュース記事のタイトル「ソ連へTQC伝授」が談話トピックの決定に関与していると考えられる。ニュース記事のタイトルと談話トピックの関係については、Brown and Yule(1983:39)を参照。

### 参 考 文 献

- 馬場俊臣 1986. 「「主要語句の連鎖」と「反覆語句」との交渉」, 永野 賢編 『文章論と国語教育』 東京: 朝倉書店, 68-83.
- \_\_\_\_\_ 1989. 「原文と要約文の反復語句」, 佐久間まゆみ編 『文章構造と要約文の諸相』 東京: くろしお出版, 35-46.
- \_\_\_\_\_ 1989. 「要約文の指示語使用の特徴」, 佐久間まゆみ編 『文章構造と要約文の諸相』 東京: くろしお出版, 47-60.
- Bolinger Dwight L. 1979. "Pronouns in Discourse" in *Syntax and Semantics* Vol.12 (ed. by T. Givón), New York: Academic Press, 289-309.
- Brown, G. and G. Yule. 1983. *Discourse Analysis*. New York: Cambridge University Press.
- Chafe, W. L. 1972. "Discourse Structure and Human Knowledge." in J. B. Carroll and R. O. Freedle (eds.) *Language Comprehension and the Acquisition of Knowledge*. Washington: Wiley.
- Chomsky, N. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Halliday, M. A. K and R. Hasan. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.
- Hinds, J. 1977. "Paragraph Structure and Pronominalization." *Papers in Linguistics* 10, 77-99.
- Grice, H. P. 1975. "Logic and Conversation." in *Syntax and Semantics* Vol. 3 *Speech Acts*. (eds. by Cole, P. and J. L. Morgan), New York: Academic Press, 41-58.
- 加藤雅啓 1990. 「「同」表現の意味論」, 上越教育大学研究紀要 第9巻第2分冊 15-29.
- 久野 暉 1978. 『談話の文法』 東京: 大修館
- 牧野成一 1980. 『くりかえしの文法』 東京: 大修館
- 安井 稔 1978. 『新しい聞き手の文法』 東京: 大修館
- 安井 稔・中村順良 1984. 『代用表現』『現代の英文法』第10巻 東京: 大修館

## Functional Consideration of Repeated Noun Phrases and “*DOU*” Expressions

Masahiro KATO

### ABSTRACT

Through investigation of the articles taken from Japanese newspapers, this study argues the complementary functions of a repeated noun phrase and a “*Dou*” expression in discourse. The former is characterized as a device foregrounding a discourse topic, while the latter characterized as a device backgrounding it.